

『夜明けの漁』井上隆晶牧師
ヨハネによる福音書21章1～14節

①【何度も復活した姿を現されるキリスト】

今日はガリラヤ湖畔（ティベリアス湖畔）に復活した姿を現わしたイエス様のお話をします。ヨハネによると三回目だそうですが、（14節）使徒言行録によると40日間にわたって現れた、とも書かれています（使徒1:3）。何度も何度も復活した姿を現わされるのは、弟子たちの教育のためだったと思います。人は一回や二回教えられてもすぐに理解することはできず、お腹の底から分かるためには時間が必要なのです。ましてこの世の事ではなく、天上の神秘ですから尚更です。

●妻をご病気でなくされたある信徒さんは、聖書など信じられない、祈っても無駄だとずっと言っていたのですが、先日聖餐式でパンとぶどう酒を食べた時、初めて「ああ、イエス様が入って来た」と感じたと仰っていました。それまで何年かかったことでしょう。それまでに多くの人の愛と祈り、神様の忍耐と愛があつたことを思います。繰り返すこと、特に同じ祈りと動作を繰り返すことは信仰の成長のために大きな力になります。

②【二回の何も取れない漁から学ぶこと】

ペトロとの六人の弟子たちは舟に乗り込み、漁に出かけました。しかしその夜は何も捕れませんでした。ルカ福音書5章にも「何も取れない漁」の物語が出てきます。なぜ同じような経験の話が聖書の中に出てくるのでしょうか。

（1）人は同じ経験を繰り返す、同じ失敗を繰り返すという事です。一人の人でもそうですし、時代を越えていろんな人に同じ経験は繰り返されます。これらの物語はすべて前例として書かれており、私たちがこれらから学ぶためです。あなたがもし何度も同じ失敗を繰り返すなら、何かが間違っているのです。

●先日、シャロン千里（高齢者施設）の入居者さんが、「先生、聖書が手に入ったので読んでみました。エデンの園の善惡の知識の木の実を食べる物語など、科学の知識を手に入れても争いを辞められない現代の人間の姿を予言しているようです。この書を書いた人はすごいですね、他の書物とは比べものにならないほど深いですね。」と言われました。

聖書は、「これは私のことが書かれている！」と思って読まなければなりません。

（2）ヨハネとルカの何も取れない漁の共通な所はどこでしょう。「一晩中、網を降ろして漁をした」ということと、「何も取れなかつた」ということです。違う所はどこでしょう。ルカの方は「イエス様は舟に乗っていた」こと、ヨハネの方は「イエス様は陸にいた」ことです。舟の中にいるイエス様は復活前の姿であり、

陸にいるイエス様は復活後の姿でしょう。湖は安定しないこの世を象徴し、陸は神の国の岸辺を象徴しています。しかし、どちらもキリストの指示に従わなければ、大漁の経験をすることが出来なかつたということです。ルカでは「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい。」（ルカ5:4）と言われ、ペトロは「先生、私たちは、夜通し苦労しましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう。」（ルカ5:5）と言って、言葉の通りに実行しました。ヨハネの方は「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば取れるはずだ。」（ヨハネ21:6）と言われ、弟子たちが言われた通り網を打つと153匹の魚が取れました。4世紀のヒエロニムスは、153匹の魚とは地中海の全ての魚の種類であり、あらゆる人が救われるという意味だと解釈しました。またある学者は「舟の右側とは外国人を意味する」とも解釈しました。当時のユダヤ人にとって外国人が信じる者になるとは想像もしなかつたことのようです。私たちは、夜通し苦労して何の成果も生まれなかつたとしたら、「これだけやっても変わらないなら、もうやるだけ無駄だ」と思つて、結論を簡単に出してしまつのです。でも最後にもう一回だけやってみて、それが実を結ぶかも知れないのです。

- ・「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたつてから、それを見い出すだろ。」（箴言11:1）
- ・「朝、種を蒔け、夜にも手を休めるな。実を結ぶのはあれかこれか、それとも両方なのか、分からぬのだから。」（箴言11:6）

伝道も特にそうです。私たちは福音を伝える前からけつこう決めつけていることがあるように思います。ヤクザは無理とか、親は無理とか、この人は無理とか思い、福音を伝えること自体をしなくなっています。私は、ここを読みながら勇気をもつてはつきりと誰にでも伝えてみようと思う様になりました。これは主権は誰かという試験なのです。自分を主人にするか、キリストを主人とするかの試験です。自分の判断で行うか、神の言葉に従う僕になるかの試験なのです。

●榎本保郎牧師の話を思い出しました。彼が神学生の時、ある田舎の教会に派遣されました。その牧師は路傍伝道に行こうと言って彼を誘いました。榎本神学生は、牧師が立つための木のミカン箱を持ってついて行きました。辻に立ち、牧師は箱の上に立って話をしますが、誰も立ち止まって聞く人はいませんでした。ふと一人の少年が近づいてきて「アーメン、そうめん、冷そうめん」（日本人がキリスト教徒を馬鹿にする時のことば）と言って榎本神学生を馬鹿にしました。恥ずかしいやら、腹が立つやらで悔しい思いをして教会に帰ると、牧師は感謝の祈りをしようと言います。榎本神学生は「何が感謝だ。これだからキリスト教は馬鹿にされるんだ」と腹が立つて祈らなかつたそうです。何年かが過ぎ、榎本牧師の教会に一人の神学生が派遣されてきました。彼は榎本先生を見るなり「先生、僕を覚えていますか？昔、路傍伝道をしていた先生にアーメン、そうめんと言ってバカにした少年です。」と言われたそうです。榎本牧師は神様のなさることを驚き、涙を

流して悔い改めたそうです。

③【主を知るために信仰生活もある】

弟子たちが「陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」(9節)とあります。既に陸にはパンも焼いた魚も用意していました。では何のために苦労して漁をさせたのでしょうか。私たちは何のために伝道をするのでしょうか。信徒を増やす為でしょうか。聖書は「永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。」(使徒 13:48)と書いています。信じる人は既に定められているのです。答えは、伝道をすることによって、神様が本当に生きておられることを知り、神様の業を体験する為です。それをひと言でいいうなら「神を知るため」です。旧約聖書の中に繰り返し出てくる言葉に「～をして栄光を現わす時、あなたがたは私が主であることを知るようになる。」というものがあります。「主を知る」ために、すべての信仰生活やさまざまな活動があるのです。だからここでも弟子たちは「主であることを知っていたからである」(ヨハネ 21:12)と書かれているんです。

教会が大きかろうと小さかろうと、「主の業」が現れなければ意味がないのです。私たちはキリストを離れて何も出来ないのであり、キリストはこの世界を支配しておられ、本当に生きて働いておられるということを知りたいと思います。

④【キリストと共に朝食を取る】

弟子たちが陸に上がると、既に朝の食事が用意されていました。私たちにも天国に行くと、必要なものが用意されているのです。

●イエス様は「わたしの父は今もなお働いておられる。だから私も働くのだ」(ヨハネ 5:17)と言って安息日に病人を癒されました。ある修道士は、この聖書を読んで「私たちも同じようにこの世では働くのです。休むためには永遠という時間が用意されてあるのですから。」と言っています。私にも安息、休息が用意されていることを思い、この世では働き続けたいと思います。

イエス様は「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(12節)と言われ、パンと魚を取って弟子たちに与えられました。この岸辺での食事は、天国での食卓を連想させます。面白いことに、聖書は善惡知識の木の実を食べる物語で始まり、イエス様の手からいただくパンを食べる物語で終わっています。聖書は一貫して「食べる話」で貫かれています。キリスト教だけが、礼拝の中で共に食事(聖餐)をします。食べるとは生きるという事です。つまり人は神によって生きるものであり、神キリストの手から命をいただいて、永遠に生きる者となることが人生の目標であると教えてているのです。人はこの世でも、来世でも自分の力では生きれません。私が未熟児で半年保育器の中にいた時、自分の力では生きれませんでした。それは大人になった今でも実は同じであって、来世でも同じなのです。イエス様の手からいただく命のパンは何という力、何と美しいものでしょう。私は来世でも永

遠に生きるので。彼が私を望まれ、私を永遠の愛で愛し、私をご自分の命で生かされるからです。「さあ、来て、朝の食事をしなさい」この言葉を味わい、天国の岸を思いながら、平安な心で生きましょう。